

[009]ポリモルフィア表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7348008>

出版情報：ポリモルフィア. 9, 2024-03-21. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

【追悼】

大坪久子先生を偲んで —女性研究者への応援に感謝を込めて—

上瀧恵里子

九州大学男女共同参画推進室 教授

2023年7月30日、大坪久子先生が永眠されました。つい2ヶ月ほど前にメールのやりとりをしたばかりで、俄かには信じられませんでした。大坪先生は「動く遺伝子とゲノム動態」に関する著名な研究者であると同時に、女性研究者支援事業に関わる者であれば、知らぬ者は無いほど長年我が国の女性研究者の環境整備、活躍促進に尽力された方です。1968年九州大学薬学部卒業というご縁もあり、外部有識者委員、外部評価委員として九州大学の発展にも寄与いただきました。本稿では、九州大学との関わりを中心に大坪先生の御貢献への感謝の思いを綴らせていただきます。

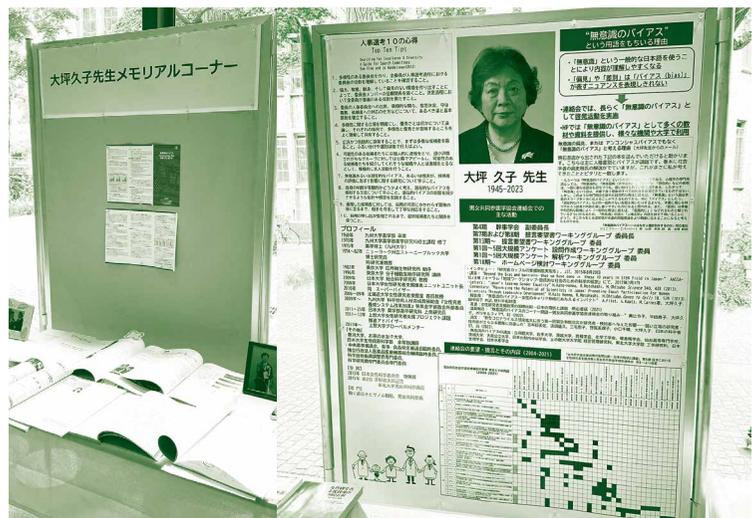
男女共同参画学協会連絡会のインパクト

大坪久子先生に初めてお会いしたのは2007年9月10日、東京の学士会館でした。前年度から

始まった文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業 [1] (以下モデル事業と表記) に旧帝大の7大学が全て採択されたのを機に、翌2008年9月26日、7大学の全総長が登壇する女性研究者支援シンポジウムが開催されました [2]。その準備の顔合わせの席のことです。大坪先生は、当時は東京大学に在籍中ながら北海道大学女性研究者支援室客員教授として参加されており、初対面の方ばかりで緊張気味の九大関係者に「実は私は九州大学の

出身なのよ」と、あの穏やかな笑顔で優しく声をかけて下さいました。

その前年の2006年10月に東京大学で男女共同参画学協会連絡会 (以下連絡会と表記) 第4回



2023.10.14 第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム
大坪久子先生 メモリアルコーナー

写真提供 北海道大学 深谷桃子氏

シンポジウム [3] が開催され、初めて参加した私は、登壇者の「今年は女性研究者支援元年です」との力強い宣言に、これから何かが変わっていくのだと大いに期待を感じました。大坪先生はそのシンポジウムの実行委員長を務めるなど、同連絡会で長年活躍された重鎮であることを後になって知り、すごい方とお話しできたのだと嬉しくなりました。

九州大学はこの連絡会シンポジウムに、モデル事業に採択された2007年を皮切りに、2022年までほぼ毎年文部科学省補助事業の取組みをポスター発表させていただきました。会場に行けば大坪先生に必ず会えると安心して参加しました。ただ、全国各地から関係者が集まるため、時には大坪先生の前に長い列ができ、ゆっくりお話しできる機会も限られていました。2022年10月の東京大学での第20回シンポジウム [4] では、大坪先生は途中まで会場に顔を出されており、お土産の松露饅頭を何とかお渡しできました。直接お目にかかれたのは、それが最後となりました。

2023年10月の連絡会第21回シンポジウムでは、大坪先生の御功績を讃えるメモリアルコーナーが開設されました。(写真参照)

女性枠採用への理解と協力

大坪先生は2006年のモデル事業の開始以降、連絡会に加え、各地の大学での講演あるいはモデル事業への助言で全国を飛び回っておられました。九州大学も2007年に採択されたモデル事業の一環で2008年12月に当時東京大学に在籍中の大坪先生を招いて「女性研究者のキャリア形成：現状と将来 ～男女共同参画学協会連絡会による大規模調査に基づいて～」と題して御講演をいた



2008年12月九州大学にて講演中の大坪先生 [5]

だきました [5]。(写真参照)

その翌年の2009年に科学技術振興調整費「女性研究者養成システム改革加速」事業（以下加速事業と表記）が始まり、九州大学が採択 [1] されると、採択発表から間を置かず、この時には東京大学を御定年され日本大学に移られていましたが、大坪先生は東京からわざわざヒアリング調査にお見えになりました。採択課題「女性枠設定による教員採用・養成システム」の「女性を優遇するのではなく、機会を与えて育てる」という理念や、人事ポイントを活用した全学的な思い切った実施方法に、高い関心を持たれました。もともと大坪先生ご自身も女性限定公募に躊躇する日本の女性研究者に対し、「おい、おい、おい、しっかりしろよ。チャンスは逃さずつかむのです。そして実績出せばいいんでしょうが・・・。」 [6] とのお考えをお持ちで、大いに九州大学の取組みに共感されました。

九州大学のシステムは女性限定の国際公募で、透明性の高い2段階審査を実施しました [7]。理事・副学長、部局長が参加する全学審査会には女性の外部有識者2名を学外審査委員とし、大坪先

生にはこの委員を2009年の開始当初から、補助事業終了後大学自主事業になった後の最終年度の2018年まで10年にわたり続けていただきました。九州大学の理事・副学長、部局長が順次交代していく中、都合で欠席されることはあっても、最後まで審査委員を務めていただいたのは大坪先生ただお一人です。

全学審査会では部局推薦の採用候補者に加え、採用予定の部局長がプレゼンします。審査委員の大学執行部と部局長が、ほとんど男性である中、もうお一人の女性外部有識者委員とともに、候補者には同性の立場から、部局長には受け入れ態勢などについて、時には手厳しい質問をされることもありました。その一方で、両者に返送するコメントシートには、いつも相手の立場に配慮し、今後の活躍や進展を期待するコメントを残されていました。

また、女性枠の全学審査会の開催前後に大坪先生と既に採用された女性教員との懇談会を設定し、彼女たちの精神的なメンターの役割も引き受けて下さいました。九州大学では本システムで10年間に50名(教授7名、准教授25名、講師2名、助教16名)の女性教員を採用しましたが、その半数近くの教員は大坪先生と直接懇談した経験を持っています。

環境整備に加えて女性リーダー育成を

大坪先生はアメリカの大学でご夫妻での研究活動を経験されましたが、日本へ帰国するに際し男性に比べて女性が非常に苦勞することを自ら経験されています [8]。欧米に比べて大きく遅れている日本の女性研究者の現状を、後に続く若手のために改善したいという強い思いが大坪先生のモ

チベーションであったと思います。

日本でも2006年以降、女性研究者を支援する施策がいくつもなされてきましたが、大坪先生は女性を弱者として支援する視点では、いつまでたってもアメリカには追い付けず、女性を自立した研究者として活躍を促進させ、リーダーを育てる施策が必要であると強調されていました。2014年1月に九州大学で開催したリーダー育成セミナーでは「Beyond the Bias and Barriers ～日米にみる女性研究者支援～」のタイトルで講演いただきました [9] が、この時も女性リーダー育成が急務と訴えられていました。

九州大学は2015年度から文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(以下ダイバーシティ事業と表記)(特色型) [1] に採択されました。この事業でも大坪先生に外部評価委員をお願いしました。大坪先生は本事業の特に配偶者帯同雇用制度 [10] に対し、その準備の進捗状況、制度制定後の運用状況にも常に関心を持たれました。九州大学の制度は海外制度をモデルにし、優秀な人材確保に重点を置いていましたが、大坪先生は制度制定後も、もっと若手もアプライしやすい制度をと、若手研究者に寄り添った提言を続けられました。

制度検討の途中では2016年3月にスタンフォード大学のシービング教授を招いて、配偶者帯同雇用に関するシンポジウムを開催しました。その際に大坪先生はパネリストとして登壇され、日米両方の研究現場を知る立場で意見を発信されています [11]。

2017年にはエルゼビア社の事例 [12] にならって、九州大学は男女別の論文業績分析を実施し、特に女性枠システムで採用された教員の業績が平



2016年3月シンポジウムにて 左から3番目が大坪先生[11]

均して高いことがデータで示され、女性研究者に対する無意識のバイアスの存在を明らかにしました [13]。さらに環境さえ整えば、結婚や出産は研究のマイナスにはならないことをデータで示しました [14]。大坪先生はかねてより無意識のバイアスの問題にも積極的に取組まれており [15]、九州大学の分析結果は女性研究者への無意識のバイアスの排除、女性活躍の可視化に繋がるものとして大いに歓迎していただきました。また、これらの成果により九州大学は2018年第5回東北大学澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞 [16] を、そして2019年には日本科学技術振興機構の第1回輝く女性研究者活躍推進賞（ジュン・アシダ賞） [17] を授賞し、大坪先生にも大変喜んでいただけました。

SENTAN-Qへの理解とリーダー育成への希望

九州大学は2019年度にダイバーシティ事業(先端型)に採択 [1] され、ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修 (SENTAN-Q) を開始しました (<https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/>)。毎年10名ほどの女性及び若手教員が、2年間の国際研修を通じて実力と自信をつけ、1段階昇任する研修プログラムです。研修生の選定にあたっては、

事前は無意識のバイアスチェックシートを審査委員に配布し、署名の上、提出いただくなど公正な審査となるよう配慮しています。

SENTAN-Qでは分野、職位、国籍の異なる男女混成の研修生が、海外のトップ大学の副学長クラスからダイバーシティや大学ガバナンス・大学の在り方について学ぶプログラムが生まれ、将来のリーダーとなるための布石ともなっています。

大坪先生はSENTAN-Qのリーダー育成を促進する制度設計に高い関心を寄せられ、選出される研修生や進捗状況などもいつも気にかけて下さいました。また、研修修了生のその後の活躍にも大いに期待されていました。コロナ禍以降色々なイベントや講演会がオンラインになる中、大坪先生は九州大学の関係イベントはかかさず参加されました。2023年3月のダイバーシティ事業(調査分析)のシンポジウム(本誌特集に掲載)も聴講され、報告がポリモルフィア誌に掲載されるのを楽しみにされていました。

2023年4月28日のNHKニュースウオッチ9で、九州大学の女性枠設定による教員採用の成果と現在進めているSENTAN-Q研修が7分ほどで紹介されました。その放送直後に大坪先生から、「よく、纏まっていましたね。九州大学が取り上げられて満足です！これからもますます頑張ってください。」とメールが届きました。長年九州大学の取組みを見守って下さった大坪先生のお言葉です。SENTAN-Qを主導する玉田薫副学長も、そして私自身にも大きな励みとなりました。

後に続く世代へ向けて

大坪先生は本ポリモルフィア誌にも論文、書籍紹介、活動報告を執筆されており [18-20]、

発信することの大切さを常に強調されていました。さらに日本語で発信しても海外から見れば何も発信していないのと同じである、と英語で発信することの重要性にも言及されていました [9]。

また、後進を育成することにも心を砕かれ、2016年の夏のある日、女性枠採用審査会終了後の懇親会の席上、大坪先生から「九州大学にも女性研究者を応援するための基金を是非作って下さい。」と要望がありました。そこで誕生したのが「九州大学女性研究者活躍促進プロジェクト基金」です [21]。これが契機となり、現在に続く伊藤早苗賞 [22]、QURIESプログラム [23] の設立に繋がりました。寄付者名簿の最初は大坪先生です。

初めてお目にかかってから15年あまり、九州大学の取組みにも学外の委員として直接貢献いただきました。加速事業が始まって以降は、頻繁にメールのやりとりをするようになり、九州大学の取組みを色々な機会でご紹介いただきましたし、個人的にもいつも励ましていただきました。サブライズがお好きな面もあり、来学の際には嬉しいお菓子の土産を持参下さることもありました



2010年12月 クッキーのおみやげ (筆者撮影)

(写真参照)。亡くなられて月日が経っていく中、大きな支えをなくしてしまったような寂しさを改めて感じております。

長年にわたり九州大学を応援し、そして何より我が国全体の女性研究者の活躍促進に尽力いただいた大坪久子先生を偲ぶ本稿は、大坪先生の御講演 [9] の最後のお言葉を、後進へ託された思いとして紹介し、締めくくりと致します。

冒頭の2006年に期待した女性研究者をめぐる変化は、時間はかかりながらも着実に進んでいます。そして大坪先生の思いを継いで、今後も進めていかなければならないと思っています。

「先は長いのです。女性研究者同士の助け合いが改めて必要とされています。若手は実力をつけ、機会を逃さずにチャレンジし、先行者は後から来る人を育てて引き上げる努力をしてください。」

(2014年1月15日 大坪先生御講演記録より)

参考情報等

- [1] https://www.jst.go.jp/shincho/josei_shien/program/index.html 2006年度以降の文部科学省女性研究者支援各事業の採択機関、概要を掲載。
- [2] 男女共同参画シンポジウム開催報告「男女共同参画社会の実現に向けて ―女性研究者支援を通じた基幹大学の役割」学士会会報 2009-I No.874, p.122-125
- [3] https://www.djrenrakukai.org/events06_1.html (2023年11月8日アクセス)
- [4] https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2022/20th_symp_report.pdf (2023年11月8日アクセス)
- [5] 九州大学女性研究者支援室「世界へ羽ばたけ！女性研究者プログラム 平成20年度活動報告」2009年3月
- [6] <https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/notice/view>

- php?cid=302&page=17&r_search=& 大坪久子氏
エッセイ「今振り返る『日米』共同参画事情」(2023
年11月8日アクセス)
- [7] 「女性枠を設定した教員採用とその成果」上瀧 恵
里子, 物理科学雑誌 パリティ, Vol. 28 No. 01, pp.
87-90 (2013)
- [8] [https://scienceportal.jst.go.jp/explore/
interview/20150813_01/index.html](https://scienceportal.jst.go.jp/explore/interview/20150813_01/index.html) Science
Portal, 2015年8月13日インタビュー「男女が共
に活躍できる社会へ」, 第1回大坪久子氏「私と
女性研究者支援」(2023年11月8日アクセス)
- [9] 女性研究者養成システム改革加速事業 九州大
学リーダー育成セミナー「Beyond the Bias and
Barriers ～日米にみる女性研究者支援～」2014
年1月15日 講演記録冊子
- [10] [https://cheers.jsps.go.jp/casestudy/kyushuuniv/
\(2023年11月8日アクセス\)](https://cheers.jsps.go.jp/casestudy/kyushuuniv/) 日本学術振興会
CHEERS!の大学等の取り組み事例で紹介
- [11] 「多様性の確保と性差に着目した科学技術革新シ
ンポジウム」2016年3月18日 九州大学医学部
百年講堂、抄録はポリモルフィア Vol.2, pp.8-39
(2017) に掲載
- [12] 2017年オランダの学術論文出版社エルゼビア社
が、自社の論文データベースScopusを用いて、
12の地域、27の分野の研究業績を男女別で分析
し、Gender in the Global Research Landscape に
まとめた。
- [13] 「九州大学の分析事例」劉沙紀、ポリモルフィア
Vol.3, pp.33-37 (2018)
- [14] Gender Analysis: Evidence-Based examination
of Research Activity in Kyushu University 抄 録
World Social Science Forum 2018 発表報告、玉
田薫、ポリモルフィア Vol.4, pp.40-47 (2019)
- [15] 男女共同参画学協会連絡会「無意識のバイ
アスコーナー」[https://www.djrenrakukai.org/
unconsciousbias/index.html](https://www.djrenrakukai.org/unconsciousbias/index.html)
- [16] [https://dei.tohoku.ac.jp/initiatives/sawayanagi_
award-2023/](https://dei.tohoku.ac.jp/initiatives/sawayanagi_award-2023/)
- [17] [https://www.jst.go.jp/diversity/about/award/
award2019.html](https://www.jst.go.jp/diversity/about/award/award2019.html)
- [18] 「女性研究者増加政策における『パイプライン理
論』—2006～2015年のシステムティックレ
ビューの検討から—」横山美和, 河野銀子, 財部香
枝, 小川眞里子, 大坪久子, 大濱慶子, ポリモルフィ
ア Vol.2, pp.94-107 (2017)
- [19] 書籍紹介「『WHAT WORKS : Gender Equality by
Design』 by Iris Bohnet」大坪久子, ポリモルフィ
ア Vol.3, pp.113-118 (2018)
- [20] 活動報告「無意識のバイアスのコーナー開設 —
男女共同参画学協会連絡会の取り組み」裏出令子,
平田典子, 大坪久子, ポリモルフィア Vol.7, pp.82-
89 (2022)
- [21] <https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/kikin/>
- [22] [https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/upbringing/
SanaeltoAward.php](https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/upbringing/SanaeltoAward.php)
- [23] [https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/upbringing/qries.
php](https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/upbringing/qries.php)

【追悼】

大坪久子先生の女性研究者支援への想い —共同研究を通して—

河野銀子

九州大学男女共同参画推進室 教授

7月30日、複数のメールで大坪久子先生のご逝去を知りました。仙台から山形に戻るバスの車中でしたが、涙があふれて止まらなくなりました。

大坪先生はゲノム動態等を専門とする理系研究者で、私は教育や科学技術政策を対象とするジェンダー研究者。大坪先生が九州大学薬学部に入學された年、私はまだ生まれていませんでした。研究分野も世代も大きくかけ離れていて普通なら出会うはずのない大坪先生と初めてお会いしたのは、小川眞里子先生（現・三重大学名誉教授）代表の科研費（JSPS 25360043 [1]）の研究会でのことでした。小川先生をはじめ、女性研究者問題を研究するにあたって、文系だけ、理系だけということでは研究も政策も進展しないと考えていた共同研究に大坪先生を迎えたことで、研究は飛躍的に発展することになりました。異質な者同士の出会いの重要性を実感したものです。ソウルで開催されたジェンダー・サミット6にもご一緒し、また韓国・台湾との共同研究の成果を投稿する際にも随分とお世話になりました [2]。

その後、2016年度から筆者が代表で取組んだ女性研究者支援政策の国際比較をテーマとする共同研究（JSPS 16H03324）にもメンバーとして入っていただきました。欧州の科学技術とジェン

ダーに詳しい小川先生と、米国の女性研究者支援の実態と政策に詳しい大坪先生が多くの情報を提供してくださったおかげで、研究代表者の能力をはるかに超えるインパクトある研究プロジェクトとなりました。大坪先生はご自身の米国のお知合いを次々と紹介して下さって、直接お話をうかがうことができました。政策立案や決定過程には公的な記録としては残らない議論や交渉、妥協等が多くあるため、関係者にインタビュー調査を行って掘り下げることができたのはきわめて重要なことでした。

こうして研究会を通じてお世話になったのは、10年ほどになりますが、この間、科学技術・学術界のジェンダー平等推進に向けたほとぼしる情熱と行動力に、魅了され続けていました。実のところ、研究会のメンバーと「パワフルすぎてついていけない」とこぼすこともあったほどですが、最終的に『女性研究者支援政策の国際比較』（明石書店、2021）として纏めることができました。出版をととても楽しみにされていたのに、私の事情で科研費終了後に取り掛かることになってしまい、ご心配をおかけしましたが、病魔と向き合いながらも熱い筆を走らせてくださいました。

周知のことと思いますが、大坪先生は男女共同

参画学協会連絡会でも中心にご活躍され、大規模アンケートに基づく調査結果をエビデンスとして政策提言も行ってこられました。連絡会を通じた活動は、政策のみならず、人文社会科学系の学協会にも影響を与えたと思います。「人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会」(GEAHSS 略称ギース)のホームページ [3] を見ると、自然科学系の先んじた動きに触発されて会が成立したと記載されているのがわかります。また、先生は「無意識のバイアス」のリーフレットや「人事あるあるビンゴ」等、ツールの開発にも熱心で、ジェンダーに関心のない人々を巻き込む方を常に考えて行動されていたことが強く印象に残っています。

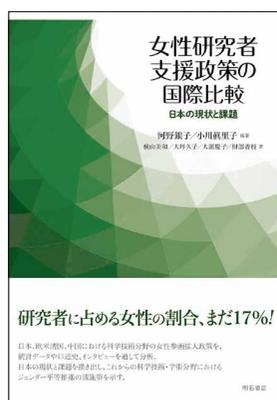
大坪先生との主たる思い出は研究会にあります。研究会以外のことでも有益な情報をくださった。ご助言をくださった。面倒見のよい方でした。国内外の多くの仲間や弟子がいるにもかかわらず、新しい知人程度にすぎない私のことまで気にかけてくださっていたことに感謝しています。理路整然として、綺麗ごとの激励や根拠のない称賛を含まない先生の言葉は、自分が考えなくてはならないことを整理したり、優先すべきは何かを検討する際に大いに助けとなりました。たいへんはすぐに返信をくださるのに少し間が空き始めたのは春以降だった気がします。それでもパリッとした文面のメールがきていました。しかしながら、訃報に接することとなりました。

翌7月31日付で、九州大学男女共同参画推進室教授の選考結果を受け取りました。九州大学のことをよく話されていた先生にいちばんに伝えたかったのですが、叶いませんでした。もうひとつ、今年9月に澤柳記念DEI賞 [4] を受賞したこと

もお伝えしたかったです。大坪先生は第2回澤柳記念賞 [5] を受賞されています。その頃とは少し趣旨が変わったようですが、大坪先生のあとに続くことができたことをこの上なく光栄に思うとともに、賞の重みに恥じないしごとをせねばと心に誓った次第です。

大坪先生はいなくなりましたが、先生の想いは全国各地の後進が受け継ぐことでしょう。その一人として、女性研究者の実態や支援政策の研究を続けていきたいと思っています。それが、

私にできる何よりの恩返しだと思いますし、先生も喜んでくれるに違いありません。心より大坪先生のご冥福をお祈り申し上げます。



河野銀子 / 小川眞里子 編著
横山美和 / 大坪久子 / 大濱慶子 / 財部香枝 著
『女性研究者支援の国際比較：日本の現状と課題』
(明石書店、2021年)

[注]

- [1] <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-25360043/>
- [2] *International Journal of Gender, Science and Technology, Vol.9, No.1.* (2017) (<https://genderandset.open.ac.uk/index.php/genderandset/article/view/409>) に掲載された。
- [3] <https://geahssoffice.wixsite.com/geahss/geahss>
- [4] <https://www.bureau.tohoku.ac.jp/danjyjo/sawayanagi/sawayanagi.html>
- [5] <https://www.tohoku.ac.jp/japanese/2015/09/press20150925-04.html>